

聖書:使徒の働き14章19～28節

説教:苦しみを経て神の国へ入る

はじめに

パウロは、ユダヤ教パリサイ派の先頭に立ち、熱心にキリストの教会を迫害していましたが、ある日まぶしい光に照らされ、よみがえられた主イエスからこう問われました。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」

パウロは、神を愛すべきであると人に説いてきました。人に語る以上、自分がその先頭に立つべきである。それで神の敵である教会を迫害してきた。ところが今、神ご自身の口から、あなたは神を迫害している、あなたは神を苦しめている、と言われたのです。突然のことで混乱し、目が見えなくなった彼は地面に倒れ込んでしまいます。そんなパウロに対して主は続けてこう語ります。「立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたがしなければならないことが告げられる。」そのすべきことについては、後に主はアナニヤに明らかにされます。「あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたしの選びの器です。」

それで、パウロはイエス・キリストの福音を伝える海外宣教師になるわけですが、彼は生涯の間に三回の大きな伝道旅行をしたと言われています。いま見ているのは最初の伝道旅行です。アンティオキアの教会から派遣されて地中海を船でキプロス島に渡り、ペルゲに上陸してトルコ共和国の内陸部に足を伸ばし、今はリステラという町にあります。そこで起きた大きな騒ぎから見てまいります。

1 パウロ

1) 石打にされる

その騒ぎというのは、パウロが、リステラに来る前に滞在していたイコニオンの町に関係しております。そのイコニオンの町で、パウロが会堂で旧約聖書を開きながらイエス・キリストこそ神が約束してくださった救い主であることを証しました。エルサレムにいたユダヤ人たちはその救い主を十字架にかけて殺したこと。しかしよみがえられたイエスを信じる者はその方によって義と認められることを解き明かします。これを聞いたある人たちは信じてクリスチャンになったのですが、残りのユダヤ人たちは信じようとせず、かえってパウロたちを迫害し、殺そうという計画が持ち上がります。パ

ウロはその陰謀を知った、それで難を逃れるためにやって来たのがリステラだった。

パウロはリステラでも同じように宣教を続けていると、足の不自由な人が癒されるという奇蹟が起きる。町の人たちはこれを見て驚き、バルナバとパウロは人の姿をした神々であると言って大騒ぎをする。パウロたちは、それは間違いですよと言ってなんとか騒ぎを静めました。

ちょうどそこにやってきたのが、イコニオンの町のユダヤ人です。彼らは、リステラの町の人たちを巧みに扇動してパウロを詐欺師であるかのように言い立てて、石打ちにしまいます。ついさきほどまでは、パウロたちのことを神が人の姿をとって降りてこられてと叫んでいたのに、次の瞬間今度は、詐欺師呼ばわりして殺そうとする。不思議に思うかもしれませんが、よく考えると今の時代もおなじことが起きています。社会が進歩すれば人は正しく判断し行動できるようになるとかつて言われていましたが、現実はその反対です。何か気に入らないことがあれば、間違った情報を元にしてすぐに激しいことばで攻撃する。その情報が正しいのか間違っているのか、そんなことは関係がないのです。極端なことを言えば、嘘でもかまわない。ですからリステラの人たちを笑うことはできません。人間の罪の性質はどんな時代でも変わりません。

2) 召命 (9章16節)

パウロが石打にされたとき、当初は死んでしまったと思われたようです。しかし、パウロを通じてすでに信じてクリスチャンとなっていた人たちが心配してかけつけ、一生懸命治療してくれました。その甲斐があって、奇蹟的に彼は回復していきます。

もし皆さんがパウロならどうするでしょう。行く先々、どこに行っても迫害が待っています。町の人からはあしざまに言われ、常にいのちの危険にさらされる。実際に殺されかけた。ちょっとでも石の打ち所が悪かったら、助からなかったでしょう。私はパウロのように絶対にはできません。すぐに怖じ気づいて逃げてしまうでしょう。

パウロはどう思っていたのでしょうか。こんなはずではなかった、と思ったのか。いいえ、そうではない。主が彼を召し出したときに、はっきりと告げていました。「彼(パウロ)がわたしの名のためにどんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示します。」(9章16節) 召し出し

た最初の時から、あなたはこれから苦しみに会うから覚悟しなさいと言われていました。それでも従ったわけですから、パウロも文句は言えません。彼は最期、殉教の死を遂げたと言われますが、召命を受けた最初の時から覚悟していたのだらうと思います。では私たちはどうなのか。

2 苦しみを経て神の国へ入る

1) なぜ?

そのことを考えるために、21, 22節を読みます。「二人はこの町で福音を宣べ伝え、多くの人々を弟子としてから、リステラ、イコニオン、アンティオキアへと引き返して、弟子たちの心を強め、信仰にしっかりとどまるように勧めて、『私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならぬ』と語った。」

パウロは最初から「あなたは苦しみに会う」と言われていました。しかし、私たちも苦しみを経なければならぬと言われている。これはどういうことか。

先日用事があって西区役所に行ったのですが、目の前には琴似神社があります。入り口に大きな看板が掲げられてあって、「商売繁盛、無病息災、家内安全、安産祈願等々」いろいろ書いてありました。この神社の神さまを信じたら、苦しい目に遭いますよとは絶対書いていない。そんなことを書いてあるのは、聖書くらいかも知れない。皆さんも大変な宗教を信じてしまったわけです。

2) 苦しみに意味はあるのか

世の中は、なるべく苦しみに会わないように、便利になるような方向で進歩してきました。例えば、私は以前何度か大腸検査を受けたことがありますが、痛いのがいやなので麻酔をかけてしてもらった。目が覚めたら終わっていた。大量の水を飲むのは大変だったとしても、検査自体は苦しまずに済んだ。ありがたいと思います。

苦しみと言うことに関してついでに言いますと、先週私は奥歯が痛み出して歯医者に駆け込みました。普段は当たり前だに思っていたのに、ちょっと歯が痛いだけでもう世の中真っ暗。気分まで落ち込んでしまいます。苦しみに何か積極的な意味があると言われても、そんなことはどうでもよいから早くこの痛みを取り去ってくれと言いたくなる。

しかし、パウロがこのように言うのですから、何か意味があるはずですよ。

3) 「神が私たちとともに行われた」(27節)

ヒントは27節にあるように思います。「そこに着くと、彼らは教会の人々を集め、神がご自分たちとともに行われたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださったことを報告した。」

パウロとバルナバは、自分たちを送り出してくれたアンティオキアの教会に戻り、宣教報告会を開きました。この中で、「神が自分たちとともに行われたすべてこと」と、書かれていることに注意してください。「自分たちがしたこと」ではない。

「神がお一人でなされたこと」とも言っていない。神が二人と一緒に行われたこと、です。具体的な例としては、14章3節後半に書かれています。「主は彼らの手によってしるしと不思議を行わせ、その恵みのことばを証しされた。」パウロが聖書を開いて語ったとき、主もしるしと不思議を見せて下さって、みことばが真実であることを示して下さいました。実際に、リステラでは生まれつき足の不自由な人もいやされ、救われました。

でもそれだけでしょか。パウロとバルナバはどんな道を歩んできたのか。確かに多くの人たちが救われ、町には次々と教会が建てられ、長老を選んで教会の働きを委ねることもできた。でも、先ほど触れたように、パウロたちは迫害にもあつてきた。殺されそうになった。次々とパウロたちに降りかかる厳しい試練を見たら、たとえ主を信じたとしても不安にならない人はいません。そんな人たちをパウロは励ましながらこのように語ります。「私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならぬ。」

神は、パウロとバルナバと一緒に何をしておられたのでしょうか。しるしと不思議を行ったことは確かです。でもそれだけではない。実は、神は苦しみもともにされていたのではないのでしょうか。

3 イエス・キリスト

1) 神も苦しむ

主はパウロを召し出すときに言われました。「彼(パウロ)がわたしの名のためにどんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示します。」パウロだけが苦しむのではないのです。パウロとともに、神も苦しみます。そのことをパウロは知っています。

今私は「知っている」と断言しました。断言する根拠があります。パウロはむかし何をしていましたか。クリスチャンと分かれば男でも女でも次々と捕まえ率に投げ込んでいた。教会を荒らしていた。それを生きがいにしていた。ところがあるとき言われた。「わたしは、あなたが迫害してい

るイエスである。」パウロはこのことばを聞いて初めて神がどのような方を知りました。クリスチャンが苦しむとき、主も一緒に苦しむ。それが私たちの神である。

パウロは生涯のことばを胸に刻みながら歩いていきます。石打ちに会うとき、自分だけが苦しむのではない。主も一緒に苦しんで下さっている。そのことが分かるので、彼はもう一度立ち上がり、前に進みます。

2) 苦しみを通して神に出会う

救われる前のパウロは、苦しむことに意味があるとは考えたことはおそらくなかっただろうと思います。それがあるとき、自分は主を苦しませてしまったという事実を突きつけられます。それなのに、主はそんな自分を赦して下さり、神の子として迎えて下さるという経験をします。

パウロは、どのようにして主と出会い、主を知るようになったのか。こうして見ると、「苦しみ」という一本の線を通して神を知るようになったように思います。だからパウロは言うのです。神の国に入るためには、苦しみを経なければならない。

それは、苦しにあうことはしょうがないから諦めよう、という意味ではない。もしあなたがたが苦しみの中を通ることがあるなら、そこには主に結びつけられていく一本の道がある。その道は神の国に至る道である。だからあなたがたは気落ちしてはいけない。

その道がどこにあるかをはっきりと示すために、まず主が十字架で苦しみを味わって下さいました。